

## 名古屋城木造天守閣の是非

いま尾張名古屋は城をめぐる揺れている。名古屋城木造天守閣、それも2020年の東京五輪までの完成に「固執する」市長、それに「待った」をかけようとする市議会との攻防だ。前にレポートしたが、どうも問題の構図が分かりにくい。

表題と写真は中日新聞6月12日「ニュースを問う」。「城主」たる者 機熟すを待て」と、河村名古屋市長に呼びかける。

尾張名古屋は城でもつとはよく言うものじゃ。金のしゃちほこを頂き、容積ではあの江戸城も抜いて日本一。城下にそびえる姿は、まさに藩の誇りであった。

余は尾張藩七代藩主徳川宗春(1696～1764年)。この世を離れて二世紀半ほどたつが、少々気になることがあり、河村たかし・名古屋市長に伝えておきたい旨がある。

こうした「前書き」から、徳川宗春がわが信条を書き記した「温知政要」をもとに、市長に問題を投げかける。なかなか核心に迫っている。

「人のため、国のために役立つことでも 急に作り上げたものは 人々の心が騒いで心服できず 思うようにはならない」(温知政要十九条、北川宥智氏現代語訳)

「ゆっくりゆっくりと年数をかけて 念を入れて成熟させていけば 隅から隅まで滞りなく 自然と世間の事情まで良くなっていき」(同)

「自分が好きなことを他の者にも好ませ 自分の嫌いなことを 他の者にも嫌わせようとするのは とても狭い見であり 人の上に立つ者は とりわけ、あつてはならない」(同七条)

「国の仕事で費用が不足しては あらゆることでさしつかえてしまい 困窮の極みとなってしまう (その結果) 民衆がとても苦しみ---かえって無益な出費となることがある」(同九条)



(2016年6月26日)